

煉獄ホテル

小林正資



人物

里崎幸太郎 (48) . . . 無職

執事 (男) . . . 煉獄ホテルの執事。年齢設定は無いが声のイメージは30歳くらい

遼子 (17) . . . 幸太郎の初恋の女

おとん (60) . . . 幸太郎の死んだ父

おかん (77) . . . 幸太郎の死んだ母

嫁 (46) . . . 幸太郎の妻

誠一郎 (13) . . . 幸太郎の長男

愛 (まな) (10) . . . 幸太郎の長女

声 1

声 2

女子アナウンサー

医師

看護師

他

SE・車の激しいブレーキ音と衝撃音。少し間があり、救急車のサイレン。

幸太郎「なんやうるさいなあ・・・あたた。頭いたつ。飲み過ぎた。ビールに焼酎にウイスキーに・・・何かやたら飲んでもうた。はあ、また嫁はんにとやされる」

ノックの音。

幸太郎「はい？、どうぞ」

ドアの開く音。

遼子「久しぶり」

幸太郎「はいっ、あの、えっ？、どちら様ですか」

遼子「幸太郎君、私の顔忘れたん？」

幸太郎「遼子？、何で？、遼子がここに？、ってかここどこ？」

遼子「会いたかったわ。うふ」

幸太郎「ちよ、えく！！」

遼子「キスして」

幸太郎「うん、いやいや、そらすけど、えく！！。ちよちよと！！・・・」

わずかに間。

遼子「口くさっ」

幸太郎「うそ」

遼子「酒臭いしおっさん臭い」

幸太郎「ごめん寝起きやし、昨日飲み過ぎとるし。ピロリ菌なんかもあるかもしれん」

遼子「最低。気色悪。さようなら」

幸太郎「えー！、ちよとまってや。俺お前のこと好きやねん！、中学生の時から、ずっと」

遼子「だから付き合ったやん。そやのにあんた浮気したやんか」

幸太郎「浮気て、あれは・・・文化祭遅なって、薫を駅まで送っただけやんけ。それを前が勝手に誤解して、そうそうあれは雨の日やった。傘が一つしかなかったから薫と相傘で帰ったんや。うーん確かにちよとええ感じな気分やったな。薫もキョンキョン似てたし、ちよとかわいかった・・・あれ？、遼子？、どこ行ってん？、俺はじめて好きになった女お前なんや。手つないただけでめちやめちや興奮した。あんなトキメキ、あれつきりや。ちよと遼子、どこ行ったんや」

少し間。

幸太郎「・・・夢やな、夢見とるな、つじつまおかしい。まだ酔うてるな。つかこどここや？、家ちやうし、ホテルか？、うーん記憶ないわ」

ドアが開く音。

おかん「幸太郎おるか」

幸太郎「あかん完全におかしい。死んだおかん見えてる」

おかん「何言うてんのあんた。ちゃんとご飯毎日食べてんのか？」

幸太郎「食うてるよ。そんな心配いらん」

おかん「ビタミンとらなあかんで。野菜も食べなあかん」

幸太郎「わかってるわ。もう俺おっさんやで。中学生の子もおる。もう子供やないねんで」

おかん「なんややつれてるやん。そんな事では大きなられへんで。いつまでもお母ちゃんに心配かけんといてや」

幸太郎「これ以上大きなってどうすんねん」

おかん「朝はちゃんと起きてるか。あんたは朝弱いから、心配やわ」

幸太郎「大丈夫やつて。うるさいなあ」

おかん「・・・そうか、ほなお母ちゃん行くわ」

幸太郎「ちよちよ、なんでや。夢でももう少し、ゆっくりしていったらええやんか」

ドアの開く音。

幸太郎「ちようおかんで！、あかん体が動かん！、あつつ、頭いたつ、おかんで！」

ドアが閉まる音。

幸太郎「なんやねん・・・しかしおかしな夢やな・・・酔うてるいうか、だいぶ疲れとるなあ・・・ここはどこや。昨日は、遅まで酒飲んで、あれ？、どこで飲んだっけ。裏町のスナックで飲んでたっけ？、いやいやあそこは意外と高いから最近行ってへん。ほんどこやる・・・つか、なんか全然記憶ないなあ。そや、仕事、仕事さがさな。寝てる場合やない。つかこどここやー!？」

ドアの開く音。

おとん 「おまえはこんな時間なつてもまだ寝とるんか！、はよ学校行かんかい！」

幸太郎 「とりあえず頬つぺたつねっとこ。いたた。何やこれ。夢ちゃうんか。ほな幽霊やな。幽霊でもうれしいな」

おとん 「何をごちやごちや言うてるんや！」

幸太郎 「おとん、俺もう48やで。学校なんか行かんでええねや」

おとん 「ほな仕事行かんかい！、もつと悪いやないか」

幸太郎 「それがおとん、俺会社クビになつたんや。今仕事探しとるんやけどな、なかなかみつからへん。おとん、おとん知らんやろけど俺子供も二人おるし、嫁もおんねん。たいへんなんや」

おとん 「それで酔っぱらって寝とるんか。最悪やないか」

幸太郎 「おとんかて、たいがいな事しとつたやん。競馬やらパチンコやらで負けてはおかんとえらい喧嘩してた。『文句あるんやつたら出ていけ！』『出て行きます！』言うて、俺おかと何回家出したことか。子供の頃おとん大っ嫌いやった。おかんいっつも泣かしてからに、ほんま寝てる時首絞めて殺したるか何回思ったか。でもおとん、一生懸命働いてたなあ。朝六時に家出て、夜もピタッと六時に帰って来た。小さい会社の貸し工場で、油で指先いっつも真っ黒にしていたただ働いてた・・・あれ、おとん、どこ行った・・・やっぱり夢か、幽霊やったんか」

少し間。

幸太郎 「おとん、どっかで聞いているか。俺ほんまおとんの事軽蔑してたんや。あんなしやうもない、夢も何もない人生絶対いややて。あんな大人だけはなりたくないってフレーズあるやんか。俺はおとんみたいになりたないと思つてた。けどなあ嫁もらつて子供出来て、ものすご思うんや。おとんて偉かつたんやなあ。ほんで、めっちゃつらかつたんやろなあ。しょうもない人生言うてごめん。俺も気づいたらしょうもない人生や。20代の時は役者なつたる思て、東京行って、おとんもその辺までは知つてるやろう。まあ役者で食うなんて案の定無理で、就職しては何回か辞めて。今俺、おとんの人生にも追いつけてへんつつか、まったくあかん。おとんはほんまは偉かつたんやなあ、ほんでやっぱりめっちゃめっちゃつらかつたんやなあ」

ドアをノックする音。

幸太郎 「はい？」

執事 「失礼します」

ドア閉まる音。

幸太郎「あんた誰ですか？、幽霊？」

執事「私は当ホテルの執事でございます。里崎幸太郎さんですね。ご機嫌はいかがですか？、私はおお客様のご要望にすべてお答えします。何なりとお申し付け下さいませ」

幸太郎「はい。え？、ホテルなんすかやっぱり。うわゝ金かかる」

執事「煉獄ホテルをご利用いただきありがとうございます」

幸太郎「煉獄ホテル？、聞いたことないわ。ようわからんけど酔っぱらって入ってもうたんやろう。古いホテルみたいやけど、なんや高そうやし、帰りますわ」

パチン、と指を鳴らす音。

ドアが開く音。

執事「朝食をお持ちしました」

食器が運ばれる音。

幸太郎「ちよちよ、めちやめちや豪華やん！、絶対あかんて。高いやんこんなん」

執事「当ホテルのサービスでございます。さ遠慮なくお召し上がりください。他にもお

客様のお望みの事はすべてご用意させていただきます」

幸太郎「いや絶対高いがな。いいですってマジで。帰ります」

執事「承知いたしました。ではご自宅までお送りいたします」

幸太郎「いや、歩いて帰ります。すいませんいくらなんですか」

執事「ご料金は頂いております」

幸太郎「は？、そんなあほな話無いがな。つかどうなつとんねん。初恋の遼子が来たり、死んだおかんとおとんが来たり・・・ここどこやねん？、梅田の近所とかちやうんですか。なんかやばいとこちやうんか」

執事「ところでどちらにお帰りになりますか？」

幸太郎「どちらへって、家に決まってるますよ」

執事「どちらの家ですか？」

幸太郎「あんた失礼ですよ、どちらの家って家は一つでしょ。私の家に決まってますやん。嫁と子供が待ってるそりやああったかい家ですよ」

執事「暖かい家」

幸太郎「そう、そうです。私が帰ると、お父ちゃんお帰り、って子供らが玄関まで駆け寄って来ます。かわいいですよ。嫁も、気は強いですけど料理がうまくて、明るくて、

大好きな家なんです。ってか何言わせるんですか」

執事「そうですね、そのような暖かい家をお持ちの方が、当ホテルをご利用されることはないと思うのですが」

幸太郎「そやから失礼や言うてるやるあんた！、けんか売ってますんか」

執事「めっそもございません。ではお気をつけてお帰り下さいませ」

幸太郎「ほんま氣いわるいのお。これやから高級ホテルとかそんなんはむかつくねん。

まあええわ。とにかくここどの辺にあるホテルですねん。家は梅田から割と近いんやけど歩いて帰れますやろ」

執事「歩いてですか？、難しいかと」

幸太郎「なんでですねん、梅田から遠いんかここ。俺昨日どこで飲んでたんや。ほんま

どのへんなんですか？、だいたいでええですから教えて下さいや」

執事「天国と地獄の間でございます」

幸太郎「は？」

執事「地球からは二億万浄土離れております」

幸太郎「何言う тоннねん。おたく、大丈夫ですか？、おもしろいこと言おうとしてはんの

かもしれないですけど、全然おもしろくないですわ」

執事「はい。皆様最初は驚かれるかと」

幸太郎「あの冗談はよろしいですから。まじ怒りますよ」

執事「昨日の事は覚えていらつしやいますか？」

幸太郎「だから酔うて覚えてへんて。でもそんな家から遠いところで飲んでへん。少な

くとも間違いない地球で飲んどるわ」

執事「ではこちらの水晶玉を見せてください」

幸太郎「なんやねん氣持ちわるい。何か怖なってきたわ。帰して下さいよ」

水晶玉を見るときの効果音。

車の衝撃音とブレーキ音。

幸太郎「何やねんこれ。誰かが車に轢かれてる・・・は！、俺車に轢かれてるやん！！、
うわー！！」

車のドアが開いてしまる音。喧噪。

声1「あんたなんで飛び出したんや！！」

幸太郎「（弱弱しい声で）すんまへん」

声1「このおっさん自分から道路に出てきよったよな」

声2 「自殺でっせ今のは」
声1 「勘弁してくれや！」

救急車のサイレン音。

幸太郎 「・・・どういうこっちゃ」

執事 「こういう事です」

幸太郎 「俺、自殺したんか」

執事 「まあ、深く酔ってらっしゃったんでしよう。お気の毒です」

幸太郎 「つてことは、俺、死んだ？」

執事 「いえ、まだ完ぺきにはお亡くなりではありません。ただ、死ぬチャンスは残って
います」

幸太郎 「死ぬチャンスって、生きますよ。何言ってるんですか」

執事 「本当ですか。生きたいのですか？」

幸太郎 「そりゃあ・・・でも俺車に飛び込んだんや。死のうとしたんやな。いやいやい
や、何かの間違いや、だいたいさつき見たんもほんまかどうかわからん。あんた手品
師やる。それか占い師や。ずぼしやる」

執事 「自殺をされる方のほとんどは、その前後の記憶をなくしておられます。皆さんよほ
どの事情があったのでしょうか。苦しくて悲しくて寂しくて、つらくて、腹が立って悔し
くって・・・」

幸太郎 「確かに、確かに俺は仕事クビなって、新しい仕事も見つけられずで、嫁はん
から毎日文句言われてた。子供にはおとうちゃんみたいにだけはなりなやて言うとなつ
た。腹立つなあ。好きで会社クビなったんちやう言うねん。仕事無くしたら何の値打
ちもないんか俺は」

執事 「ほら暖かい家はうそですね」

幸太郎 「はあ・・・子供らもだんだん大きくなってきて、なんやけむたがりよるねん。こ
れがまた不思議なくらい勉強とかよう出来る。出来た子らや。その分うだつの上から
んオヤジを軽蔑しとるんかもしれんなあ。嫁はんはともかく子供にそう思われるのはつ
らい」

執事 「あなたもあなたの父親を軽蔑していた」

幸太郎 「何で知ってんねん。さつき謝ったわ」

執事 「あなたの下着とは一緒に洗うなど小学校五年の娘さんも言っていたそうですね」

幸太郎 「そうそうそうですねって、だから何であんたがそんな事知ってんねん！」

執事 「奥様はご近所のお友達にもあなたの悪口を二万回は言っておられました」

幸太郎 「二万回とか言うな！、し、知ってるわそんなん気い悪い。なんやねんあんたは」

執事「煉獄ホテルの執事でございます」

幸太郎「俺の事何でも知ってるんか」

執事「ケツのしわの数まで存じ上げております」

幸太郎「なんじゃそら。気色悪いわ。なんで俺の事を」

執事「当ホテルをご利用されるゲストの事はすべて存じ上げております」

幸太郎「要するにここは、死後の世界ってことですか」

執事「俗世ではあなたはまだ生きています。意識不明の状態です。ここは煉獄ホテル。

死後の世界ではありません」

幸太郎「まあ何でもええわ。俺はもう生き返らんのか」

執事「あなた次第でございます」

幸太郎「あなた次第で、どういう事ですか」

執事「というより、私の経験上、生き返りたいと望まれる方は、まずおられません」

幸太郎「なんでや？、ふつう生きたいと思うやろう・・・いやだんだん俺も自信のうなってきた。俺自分から車に飛び込んでるんや・・・そうや、正直毎日毎日仕事探しても、家族養えるような仕事いっこもつかれへん。どこも48才言うたらそれだけでアウトや。景気がどうのこうの、雇用対策がどうの言うけど現実是这样や。そら俺にもあかんとこいつぱいあるやろう。けど前の会社でも無遅刻無欠勤でちゃんとした。俺は俺なりに頑張ってたんや」

執事「どうなさいますか」

幸太郎「何を？」

執事「俗世にはお戻りにはならないですか？」

幸太郎「ならない、言うたらどうなるんですか？」

執事「天国行きか地獄行きかの審査を致します」

幸太郎「えー、やっぱり天国と地獄ってあるんですか？」

執事「まああなた達人間のレベルに合わせて わかりやすく言っているのです。実際の天国と地獄は人間たちが想像しているところとは違います」

幸太郎「どない違うんや。ほな例えば地獄はどんな感じですん」

執事「閻魔大王が」

幸太郎「閻魔大王！、もろイメージ通りやがな」

執事「閻魔大王がぼろぼろ泣きながらあなたの手を握って来ます」

幸太郎「なんじゃそれは」

執事「（急に大阪弁で）よう頑張らはったなあ、大変やったやろう、つらかったねえ、あんたは何も悪あらへんでえ・・・そういつてもものすごく同情してきます」

幸太郎「確かに閻魔大王のイメージとはだいぶちやうなあ。しかもこてこてすぎるわ大

阪弁が。西川きよし」

執事「すべて来訪者に合わせます」

幸太郎「はあ。それで」

執事「ひとしきり閻魔大王に慰められると、次は残念会を開いてくれます」

幸太郎「残念会？、それでほんまに地獄なんですか？」

執事「地獄です。残念会は真っ暗な洞窟で行われます」

幸太郎「ほう」

執事「そこでは地獄の番人たちが100人集まりあなたのために慰めの踊りを踊ったり、

あなたが浮世でつらかったこと、悲しかったことについて語り合います」

幸太郎「地獄の番人」

執事「あなたは4歳の時、保育園に預けられていましたね」

幸太郎「はあ」

執事「そこでああなたは一つ上のライオン組の女の子たちにいじめられていた。おしりに蒙

古斑があつたからです」

幸太郎「ライオン組の女の子？、そんなん覚えてませんわ」

執事「残念会ではあなたの人生で起こったすべての悲しい事、悔しい事、さみしい事、

腹が立ったことをひとつひとつ慰めるのです」

幸太郎「ひとつひとつ？」

執事「そうです。地獄の番人たちはひとつひとつ心から同情してくれます。あなたも心か

らそれを感謝することになるでしょう。何とかこの番人や閻魔大王に報いたいと思うで

しょう」

幸太郎「はあ」

執事「一日の終わりには『あんたあ、ごはんはちゃんと食べてるか、ビタミンはとってる

か』と皆心配してくれます」

幸太郎「おかんやんかそれ！」

執事「いえ違います。似て非なるものです。ただおかんのように無条件にどこまでも甘え

させてくださいます」

幸太郎「しかしそのどこが地獄なんかいまいちようわからん」

執事「心配されて、同情されて、励まされれば人間は元氣や希望が出てきます。しか

し、地獄ではその元氣や希望の使い道はありません」

幸太郎「・・・なんか難しいな」

執事「地獄は『虚しさ』だけは解消してくれません。希望や優しさを感じても、それに

報いる手段がないのです。つまり、地獄は本当の意味での虚無なのです」

幸太郎「そやから難しいって」

執事「そんなことはないはずです。あなたが俗世でいつも感じていたもの、それは深い

『虚しさ』だったはずです。自分なりに頑張っても頑張っても、誰にも評価もされてい

ない。そう思っていたはずですが」

幸太郎「うるさいわ！、むかつく！」

執事「そう、そうやって母親にはあまえていた。母親はあなたを許し続ける事を知っているからあまえるのです」

幸太郎「おまえに何がわかるねん！」

執事「あなたの負の感情すべてを地獄で同情し尽すには2万7千年かかります」

幸太郎「えらい長いなあ！、ほんでそれがどうしたんじゃ」

執事「2万7千年間、あなたは地獄にいることになります。そしてやっと何かに生まれ変わるでしょう」

幸太郎「もうなんでもええわ。とにかく地獄はいやなもんやな」

執事「よう頑張ったなあ、辛抱したなあって閻魔大王がずっと言ってくれるのに」

幸太郎「いらんわ」

執事「まあ、地獄はその人その人によって対応もかわるのですが。あなたの場合は今のパターンです」

幸太郎「ようわからんけど審査なんですやろ？、地獄は勘弁してほしいな。ところで

審査基準はなんなんですか？」

執事「基本的には私の気分次第です」

幸太郎「ええ加減なもんなんですね。俺だいぶ偉そうに言うてもうたし、地獄行ですか？」

執事「あなたは天国行きにします」

幸太郎「そうですか。有難いことです」

執事「ただこれ以上私の機嫌を損ねると」

幸太郎「そこねると？」

SE・おどろおどろしい音楽。

間。

執事「どーん！」

幸太郎「びっくりした！」

執事「別に何もありません」

幸太郎「びっくりするやないか！、なんやねんあんた。まあ俺にとっては生きてた時の方が地獄やった気がする。ほんまの地獄の方がまだまっしや。あー、腹減って来たわ。そや朝ご飯食べよ。よろしいんですよね」

執事「どうぞ。たと召し上げれ」

むしやむしやと咀嚼音。

幸太郎「うまい！、マジでこんなうまいもん食うたことない！」

執事「天国ではいつもこのクラスの食事を好きなだけ食べる事ができます」

咀嚼音。

幸太郎「ほんとに旨い！、ものすごく元気が出てきた。今やったら何でも出来そうや！、なんやろうこの感じ。なんか20歳くらいに戻った感じや。そや、東京に役者目指して行ったときこんな気持ちやったなあ」

執事「それは良かった」

幸太郎「なんかめっさ思い出す。たしか行きし、徒弟のにいちゃんトラック乗っけてもうていったんや。富士山がめっちゃくちやきれいやったなあ。あん時は何でもやれそうな気がした」

執事「天国ではどなた様も、本当に充実した日常を送る事が出来ます」

幸太郎「充実した日常？、それが天国？、どうもイメージ違うなあ」

執事「例えば、なりたいと思うものには必ずなれます。本気で好きになった異性とは必ず結ばれます。その人にとって、常に最高のコンディションが保たれるのです」

幸太郎「ほんまかいな。でも今のテンションやとわかる気もする」

執事「天国ではその人が本来描こうとした人生が歩めるのです。そう、望めば永久に。何歳からやり直して、どうしたいのか。本当に何でも叶うのです」

幸太郎「何でも叶うって、例えばべたやけど、大金持ちにも成れるんですか」

執事「ははは。もちろん望めばお金持ちくらいは簡単になれます。ただ、必要以上にお金を欲しがる人は天国では一人もいませんね」

幸太郎「へえ。なんでなんですか？」

執事「充実する日常ですから。お金が全くないと確かに困りますが、有り過ぎてもどうにもなりません。皆さん、必要以上にお金を得たら、寄付なさいます」

幸太郎「寄付って、寄付されるような不幸な人らもいてるんですか？、なんかおかしいじゃないですか？」

執事「果たして絶対的に不幸が決定づけられる客観的状況ってどんなものでしょうか」

幸太郎「またなんか難しい事言うてはる。そらあるでしょう。生まれつき体が悪いとか、目が見えへんとか。他にも何ぼでもあるじゃないですか」

執事「それを不幸とする根拠は何ですか？、不幸や幸福を客観的に見分ける事は誰にもできません」

幸太郎「そんなことないと思うけどなあ。仕事クビなって嫁はんと喧嘩ばかりしたり、

子供に煙たがられたり・・・そんなんでも充分きつかったのに、もつときつい状況いくらでもあるでしょう」

執事「確かにいくらでも厳しい状況はあるでしょう。通り魔によって理不尽に残虐に殺されたり、幼くして戦争や飢餓によって死んでいく人間もいます」

幸太郎「あなたの方がやっぱようわかってる。そうそう、そんなん充実しとるんですか」
執事「皆、生きようと、生きたいと、懸命だったはずですよ。結末だけを、死だけを怖れて、生きる人はいないのです」

幸太郎「ようわからんわ」

執事「あなたは再び全く同じ人生を歩みたいと思いますか」

幸太郎「まさか！、まっぴらごめんですよ、こんな人生。金持って、ええ女に囲まれて毎日毎日酒飲んで、面白おかしく生きたかったですわ」

執事「なるほど。自分の人生を否定なさることは最大の不幸と私どもは理解しています。すなわち俗世でのあなたの人生はもう一度歩むのはまっぴらごめんの下らない人生だったというのですね」

幸太郎「そこまであれですけど、まあそうです、あんな人生・・・俺はなんやうまい事いかへんようになって、ほんまつらかった。要するに金です。金がないとあかんのです。きれいごと言うたって」

執事「現在の俗世では金によって人間の悩みや苦しみの8割は解決するようですね」

幸太郎「そうですね。金持ち喧嘩せず言うてね、金があったら余裕が出来て、みんなええ人になりますね。逆に金が無いと、ええ人でもだんだんおかしな人間になります。喧嘩もする。そういうもんですよ」

執事「なるほど。しかし当ホテルをご利用される方々にはお金持ちも非常に多いですよ」

幸太郎「そら、きれいなホテルですからねえ。俺はラッキーやったんかな」

執事「当ホテル、煉獄ホテルをご利用になる方は条件があるのです」

幸太郎「条件？、金持ちと俺が共通する条件ってなんや？」

執事「愚か者・・・」

幸太郎「愚か者って、漠然としすぎでしょ。だいたい失礼すぎるわ」

執事「はい。ですから審査をします。愚か者と言っても多種多様ですよ」

幸太郎「そらそうや」

執事「あくまで審査が必要な愚か者です。明らかな愚か者は煉獄ホテルを経由せず、直接地獄へ送られます」

幸太郎「俺は、愚か者なんかやない。俺なりにまじめに生きてた。そやのに誰も・・・家族さえ俺の事をバカにしてた」

執事「確かにあなたは本物の愚か者ではありませんね。中途半端な愚か者」

幸太郎「なんかむかつく言い方ですね。でもまあ多いんと違いますか、そういう、なんとなく俺みたいな感じの人」

執事「確かに、非常に増えています。特に日本人はととも」

幸太郎「日本人は、ですか」

執事「はい。当ホテルご利用数の国別ランキングでは現在世界一です」

幸太郎「そうなんや」

執事「特に最近では自殺者も多いです。基本的に自殺者は当ホテルに宿泊してもらうことになりませんから」

幸太郎「それで俺が・・・酔ってて覚えてへんけど」

執事「直接地獄へ送られる方まで増えています」

幸太郎「政治が悪いんかな」

執事「どうでしょうね。2000年ほど前までは、逆に最も当ホテルを利用する事が少ない民族でした」

幸太郎「2000年前って江戸時代の方が少なかったんですか」

執事「そうですね、断然」

幸太郎「へえ、そういうもんなんやなあ。やっぱり社会もおかしくなるとるんかなあ」

携帯電話呼び出し音。

執事「失礼します。あ、お釈迦様、ご無沙汰しております」

ドアが閉まる音。

幸太郎「すげえ御釈迦さんからの電話で、ほんまかいな・・・はあ、しかしなんやえらい事なつてもうたなあ。天国に地獄、それに煉獄って。俺、生き返れるんかなあ。いや、てかこのまま死んで、天国で充実した日常いうのも悪ないやろなあ。どうせ子供や嫁はんも、せいせいした思とるやろ。ちよつとは保険金も下りるやろし、俺が死んだ方がええ事づくめや」

ドアが開く音。

幸太郎「遼子！、戻って来てくれたんか」

遼子「話があるの」

ドアの閉まる音。

幸太郎「話って？、いやその前に、何で君ここにおるねん」
遼子「はあ？」

幸太郎「俺どうもおかしな世界に来とるんやぞ。昨日よう覚えてへんねんけど自殺したらしくって、なんやわからんけど、天国と地獄の間におるらしい」

遼子「あんたこそ何わけのわからん事言ってるん？、ここ教室やで」

チャイムの音。

遠くクラブ活動の掛け声など聞こえている。

音楽「遠き山に日は落ちて」イン。

アナウンス「六時になりました。すみやかに下校しましょう」

幸太郎「ほんまや。どういうことや」

遼子「あんた、ほんまに浮気ちやうねんな」

幸太郎「うん、薫の事はなんでもない。それはない」

遼子「もう一回聞くで。ほんまに他に好きな子おらんな」

幸太郎「うん、おらん。誓うわ」

遼子「じゃキスして」

幸太郎「よろこんで」

間。

遼子「口くさ！」

幸太郎「またか！」

遼子「つてかなんであんたそんなおっさん臭いん？」

幸太郎「だつておっさんやもん」

遼子「あり得へん。よう見たらうちのお父ちゃんよりおっさんやん！」

幸太郎「あのな、だからなんかおかしいねんて。俺今48や。嫁はんも子供もおる。浮気どころか、結婚しとるわけや。何で遼子が、今の俺と出会ってんのかようわからんけど、俺はあんな嫁、どうでもええ。つてか向こうが愛想尽かしとる。嫁はんは俺の事な

んて、厄介者や思ってる。さつき遼子見て、あのころのときめきが一気に蘇った。こんな気持ちほんま久しぶりや。このテンションがあれば、俺はやり直せる。遼子、あれ？

遼子、どこ行ったんや？、行かんといてくれ！、遼子！」

ドアの開く音

おかん「あんた、ちゃんとご飯は食べてんのか」

幸太郎「・・・またおかんや」

おかん「あんた東京なんかでやって行けんのか。なんかやつれたんちゃうか」

幸太郎「・・・大丈夫や、心配せんでええ」

おかん「役者なんて、あんたには無理やで。そら応援してあげたいけど、難しい思うで。もうこつち来て何年なるねん。諦めた方がええんちゃうか」

幸太郎「うるさいねん。俺の人生や。俺が好きのようにやりたいようにやるんや」

おかん「実際あんた何もしてへんのちゃうの？、仕事もなんもないんちゃうの？」

幸太郎「うるさい言うてんねん！、俺の事は心配すんな！」

ドアの開く音。

おとん「おまえ、お母さんになんちゅうものの言い方しとんねん！」

幸太郎「何やねん！、もうほつといてくれや！」

執事「どうなされました」

幸太郎「あれ？、おとんとおかんは？」

執事「さて」

幸太郎「折角、死んだおとんや、おかんに会えたのに、また喧嘩してもうた・・・ずーと、こんな感じやった」

音楽、フェードアウト。

執事「さあ、どうされますか？」

幸太郎「どうされますかって、そんなん」

執事「あなたが俗世で感じた悲しみ、苦しみ、怒り、そして虚しさ・・・二度と繰り返したくないといった俗世でのつらさは天国ではすべて喜びに変わります。生きがい、だれかを支え、支えられる。誰かを愛し、愛される。努力は必ず報われ、苦しみは必ずび、

幸福感に変わります。それが天国」

幸太郎「そうですか・・・」

執事「何かひっかかる事でも」

幸太郎「そらあ、少しは・・・」

執事「少しは？」

幸太郎「子供ら、俺が事故に合つて、どう思うてるんかとか、嫁はんもどうなんやろうとか」

執事「気になるんですね」

幸太郎「初恋の遼子や、おとんおかんは出てきても、子供と嫁は音沙汰無しや」

執事「あなたの現在と未来に深く関わる方は基本出てきませんね」

幸太郎「あんた、何でも知っているんやな」

執事「それほどでも」

幸太郎「子供と嫁、今どうしているかわかりますか」

執事「・・・それは」

幸太郎「お、教えて下さいよ！」

執事「無理です」

幸太郎「何でや！」

執事「何でも」

幸太郎「けんか売ってますんか」

執事「まあ、奥様もお子様もせいせいされているかと思えますよ」

幸太郎「ほんまですか」

執事「たぶん」

幸太郎「たぶんで。ちょっと教えて下さいよ！」

執事「あなたは！・・・あなたは二度と同じ人生は嫌だと仰ったじゃないですか。自分の事をさんざんバカにした奥さんとお子さんの事などどうでもいいじゃないですか」

幸太郎「そらそうやけど、まがりなりにも家族ですよ。血分けた子供が、俺の事どう思っているのか気になるやないですか」

執事「では、俗世に戻って、確かめてこられてはどうですか？」

幸太郎「・・・意識不明言う事は、大けがしてるんでしょう」

執事「あばら骨が4本折れ、頭がい骨も骨折しています」

幸太郎「それは痛そうや。生き返っても、余計迷惑かかるなあ」

執事「そうですね。おそらく自殺と認定されますから、生き残れば医療費などもほとんど自己負担です。リハビリには時間がかかり、家族の負担は計り知れないでしょう」

幸太郎「あんたきつい事ずば言うなあ。そうやな、もう戻れんわなあ」

執事「あなたの俗世での過去についてなら、一部再放送できますが」

幸太郎「再放送って」

水晶玉を見るときの効果音。

音楽・なに初恋しぐれ。

嫁「あんた、仕事いつ決まるん？、もう私のパートだけではやっていかれへんで？、わかってんの？」

幸太郎「わかってるわ。俺が好きで無職になったん違うやんけ。おんなじこと何回も言わすなや！」

嫁「ほなどうすんのよこの先。私生活水準これ以上落としたないし。だいたい子供らの将来どうするんよ。一家心中でもする気？」

幸太郎「そんな事今言われてもどうもできひんやろ！」

誠一郎「なあおかあちゃん、塾、やっぱり行かせてえや」

嫁「おとうちゃんに言い」

誠一郎「お父ちゃん、塾行きたい」

幸太郎「今はちよつと我慢してくれるか」

誠一郎「今はちよつとつて、俺一回も塾なんか行つてへんで。あーあなんでこんな貧乏な

家に生まれたんやろ。おとうちゃん泥棒でもしてお金持ちなつてえや」

幸太郎「なんやと！」

愛「おかあちゃん、今日学校でおまえんとこのお父ちゃん仕事してへん言うてバカにされた」

嫁「おとうちゃんに言い」

愛「なあお父ちゃんはなんで仕事してへんの？」

幸太郎「う、うるさいわ〜！」

愛「うわーん」

嫁「子供にあたらんといてや！、最低やなほんまに！」

幸太郎「酒や酒や！、酒こうて来い！」

嫁「誰が行くか、このカイシヨなし！」

音楽・なにわ恋しぐれ・アウト。

執事「なんとも救いようがありませんね」

幸太郎「やかましわ・・・そうや、昨日この後酒飲みに行ったんや。仕事探してる間は酒

なんて飲んでなかったのに。ちきしょう、やっぱり俺が悪いんやな」

執事「お気の毒です」

幸太郎「今頃子供も嫁さんもはよ死んでくれって、みんな思つとるやろなあ」

執事「そうですね」

幸太郎「ちよつとは否定して下さいよ」

執事「私は相槌をうっているだけです」

幸太郎「幸せな時もあつたんやけどなあ。嫁はんにプロポーズした時、あいつ泣いてくれたんや。子供が生まれた時も、ほんま嬉しかった。でも、ほとんどはしんどかったな

あ。仕事も長い事単純労働やった。こんなことするために俺生まれて来たんやろかっ

て、いつつも思いつた。で、仕事クビになったら、もっと何も出来ひん現実突きつけられて・・・そら嫁はんも子供も愛想尽かすわ」

執事「何よりあなたがあなた自身に愛想を尽かしている」

幸太郎「・・・そうかもしれないですね。でもそうなりますよ。身内からも毎日うるさく言われて、社会からも相手にされてへん。弱い。ほんま自分の無力を感じました。でも全部私が悪いんでしょうか？、そんなに人間てみんな強いんでしょうか？！」

間。

執事「・・・かつて、ある哲学者の方がこのホテルをご利用になりました。その方は病気になり、精神を追い込まれ、あまりの苦しみに、自ら命を絶とうとしました。私が天国のご説明をしますと『冗談じゃない。私は生まれ変わっても全く同じ人生で良い。苦しめるのが悲しかろうが、それが私の人生だ』と。その方は珍しく、俗世に戻られませんでした」

幸太郎「戻ってどうなったんですか」

執事「自ら命を絶つ前以上に苦しみました。最後は全身から血を吹き出し、背骨が砕け、狂い死にしたそうです。断末魔に『これが我が人生か。これほど苦しいとは。されどもう一度』という言葉を残して、天国に直接行かれました。もちろん天国でも、俗世と全く同じ日常を送られています」

幸太郎「・・・なんやそれ。その人ほんま頭おかしいわ。ただの物好きか変態や。俺は普通の、どこにでもいる人間や。ただふつうに生きたかっただけや」

執事「あなたは俗世での自己を否定された。愛すべきはずの家族からもバカにされ、疎ましがられ、とうとう何もかもを投げ捨てた」

幸太郎「それがどうした！、悪いんか」

執事「善悪の問題ではありません。すべてあなたがご自分で私に仰ったことです」

執事「そうや、その通りや。誰もかれも、みんな俺の事なんかどうでもよかつたんや。」

嫁はんも子供もうちよつと俺の事、大事にしてくれてよかつたんちゃうか。もういや。あんな家、戻りたくないわ！」

執事「・・・わかりました。では天国への手続きをとりましょう」

幸太郎「・・・そうしてくれませんか」

執事「繰り返しますが天国ではあなたの思う様に、あなたの望みが叶うように、最高の環境が用意されています。天国では夢が、希望が必ず叶います。あなたが本来のあなたで居られる世界です」

幸太郎「でもよう考えたら、天国やのうても、夢や希望が叶う人はそれはそれでようさんいてるんちゃうですか」

執事「はい。仰る通りでございます。俗世で一所懸命努力され、充実した日常を送られた方はたいへい同じ日常を天国でも歩まれます。それを望まれるのです。昔はほとんどの方がそうでした。さしたる変化のない人生にこそ幸せがあることを皆さん知っておられました」

幸太郎「・・・私は、同じ人生はいやです」

執事「俗世で貧乏をした人も、戦争で命を散らした人も、地震で命を落とした人も、皆俗世で出会った親やパートナー、子供に会いたいのです」

幸太郎「・・・私も子供たちに会いたい。今度はいい父親になりたい。嫁さんは、うぐんちよつとあれやけど、プロポーズした時あいつ泣いて喜んでくれた。あの日に戻りたい」

執事「あのあなたは天国で、俗世で会った人たちには会えませんよ。天国Bパターンですから」

幸太郎「は？、天国Bパターンってなんですか？、こ、子供らに会われへんのですか？」
執事「煉獄ホテルご利用の方は、俗世での意識無意識の記憶を完全に失います。自ら命を絶ち、その上で自己を否定されて、天国へ行かれるのです。俗世での人間関係など、すでに無意味なはずですよ」

幸太郎「そんな事聞いてないよ！、ええお父ちゃんとして、子供に会いたいわ。おとんにもおかんにも会いたい。親孝行な子供になりたい。Bパターンってなんやねん」

執事「自己を否定したという事は、関わった人すべてを否定したという事になります。だから天国に行く限り、あなたの記憶は無くなります」

幸太郎「それそうかもしれんけど、それはきつい」
執事「ならば俗世にお帰りなさい。職もなく、家族から疎まれ、要するに中途半端なだけのあなたの人生に戻りなさい。あなたが居てもあなたが自覚しているように、報われないうであろう、虚しいであろう人生を歩みなさい。そしてさらに皆に迷惑をかけてその後もう一度死になさい。きっと救いようのない人生です。けれどそうすれば無条件で天国には行けます。もちろん罪のない人を殺したり、愚かな振る舞いをしてはなりませんよ。そしてその時あなたが望むなら、俗世で出会った子供達のために、あなたが理想とする父親に変わる事は可能です」

幸太郎「そんな殺生な・・・まあでも生きて戻っても今まで以上に肩身の狭い人生に決まってるな。かなり重症やろし、リハビリとかもせなかんやろし、金もかかる。あんな俺の事厄介や思ってたんや。たぶん嫁はんには・・・離婚される」

間。

幸太郎「子供らは確実に嫁はんにつきよる。やっぱり生き返ったって、俺の居場所はあら

へん」

執事「どうなさいますか」

幸太郎「ちよつと考えさせて下さいよ」

執事「堂々巡りですよ」

幸太郎「考えさせて言うてるやろ」

執事「奥さんに見放され、子供に嫌われて。生き返ってもさらに家族に疎ましがられるか
家族そのものを失う居場所のない救いようのない人生」

幸太郎「念を押して言うな」

執事「・・・予告編ありますよ？」

幸太郎「予告編？」

執事「あなたが天国に行った時の予告編」

幸太郎「あるんですか、そんなもの」

執事「ちよつとだけ」

幸太郎「見せてください」

水晶玉を見る時の効果音。

スポーツニュースのジングル。

女子アナウンサー「さあ最後に今や大リーグでも最高のプレイヤーとして誰もが認めるコ
ータロー選手ですが、ファンの子供たちに一言お願いします」

幸太郎「まず、難しい事に立ち向かう勇気を持ってください。その姿勢が人間として成長
し、強くさせて行くのです。野球が出来る事を両親や周囲の人たちに感謝して、一生懸
命練習をしてください」

女子アナウンサー「世界のコータローからの素敵なメッセージ、ありがとうございます
た」

水晶玉効果音。

幸太郎「これ、天国の俺？」

執事「そうです」

幸太郎「大リーガーになってるやん。ほんでめっさええ事言ってるし。つかイチローやん
完全に」

執事「コータロー」

幸太郎「ありえへん」

執事「子供のころから懸命に努力して、プロになってからも、努力を怠らずついには大リ

ーグでも歴史に名を残す超一流の選手になります。自分に厳しく、それでいて明るいコ
ータローは誰からも愛される人間です」

幸太郎「俺が？」

執事「そうです」

幸太郎「あんまり今言うてもうたら面白くないやん」

執事「心配ご無用。天国に行くまでの記憶はすべて消えますから」

幸太郎「モテるやろなー女に」

執事「はい。10年連続で好感度NO1。でも結婚されて、奥様を本当に大切になさいま
す」

幸太郎「お金もすごいやろなー」

執事「それはもう。でも必要なお金以外は、社会に還元されます。人々に勇気を与える、

素晴らしい人物です」

幸太郎「俺が？、ほんまかいな、かなんな」

まんざらでもない幸太郎。

執事「さあ、もう最後の確認です。どうなされますか？」

幸太郎「うん。天国に行きます」

執事「なかなかの変わり身ですね」

幸太郎「今の見たからってわけじゃないんです。ほんま、堂々巡りや。間違いなく俺はこ
のタイミングで死んだ方が嫁はんも子供も幸せになる。今もきつとえらい事してくれた
わこの人って、思われてるのに違う。うん、うん・・俺、死ぬ」

執事「わかりました。もう一度確認しますが俗世でのあなたと、あなたにまつわるすべて
の記憶が消えてなくなります」

幸太郎「はい」

執事「ではあなたのすべての意識、無意識下の記憶を消し、傷を負った心を修復するため
の、天使の輪をお持ちします」

幸太郎「天使の輪？」

執事「しばらくお待ちください」

ドアを開ける音。

幸太郎「あの」

執事「なんでしょう」

幸太郎「死んだおとんやおかんは天国でどうしてるんですか。俺が全く違う人間になる言

う事は、やっぱり会えんのですか」

執事「会えません。ただあなたのご両親は天国であなたを懸命に育てています」

幸太郎「へ？、どういう事ですか？、別の俺がおるの？」

執事「それこそ理解できないかもしれませんが、天国は一種の平行ワールドなのです。無限の事実と真実が、同時に起こっているのです」

幸太郎「ようわからん」

執事「つまりあなたのご両親は、天国で貴方を育てる事を選びました。慎ましい生活をなされつつ、大人になったあなたに苦勞をさせないために、厳しく、そして優しく育てておられます」

幸太郎「・・・そうかあ（泣く）。おとんおかん、ごめん・・・俺は世界のコータローになるわ」

ドアが閉まる音。

音楽・「遠き山に日が暮れて」イン。

幸太郎「遼子」

遼子「もうすぐ卒業やね」

幸太郎「卒業・・・ああそうかな」

遼子「私の事、忘れたらあかんで」

幸太郎「ああ。わすれへん」

遼子「うそや。絶対忘れる」

幸太郎「ああ。うそかもしれない。俺なあ、嫁はんと子供おる言うたやろ。えらいうつとしがられてなあ。まあ俺が悪いんやけど、俺なりに家族の事は愛してた。それはそれで必死やった。その間は遼子の事忘れてた。仕事失つてとうとう家に居場所ものうなつてなあ・・・あ、遼子？、はは、おらんようだった。遼子、なんか、ありがとうな」

音楽、小さくなる。

執事「・・・世界のコータロー様」

幸太郎「すでにそう呼ぶのね」

執事「天使の輪をお持ちしました」

幸太郎「これが、天使の輪・・・天使の輪いうより、なんか孫悟空が頭に着けるやつみたいや」

執事「これをつけると、走馬灯の様にあなたの記憶が蘇ります。そしてその後2度と記憶は戻りません。つまり俗世でのあなたは完全に消えて無くなります」

幸太郎「それは・・・完全に死ぬいう事ですか」

執事「そうです」

幸太郎「・・・そうですか」

執事「さあ、お付け下さい」

幸太郎「・・・わかりました・・・えーいチキショー、オリヤー！」

衝撃音。

幸太郎「いたたたた！、なんかきついですよ」

執事「外れないようにしています。もしそれが外れると問答無用で地獄に送られます」

幻想的な効果音。

幸太郎「あー、なんか赤ん坊がおる・・・あれ？おかん？、おとんも。あ、この赤ん坊俺や。こんなんやったんや。我ながらなかなかかわいいなあ・・・うわーうんこ漏らしてる。最悪や。ほんまや蒙古斑もある・・・小学生なった。このころは悪がきやったなあ。中学生なった。うわーめっちゃズボン太い。ヤンキーに憧れたんや。中途半端やっただけなあ。高校生なった・・・遼子や。手つないで家帰った。あれはドキドキしたなあ・・・もう大人なった。あー嫁はんにプロポーズしてる。嫁はん泣いてる・・・チビが生まれた。俺めっさ喜んでる・・・なんや俺、暗い顔してるなあ。だんだんそんな顔ばっかりや・・・もう終わりやなあ・・・」

車のブレーキ音。救急車のサイレン。

幸太郎「ちよつとまったあ！、ストップ！」

執事「無理です」

幸太郎「無理でも何でも止めてくれ！」

執事「無理です！」

幸太郎「止めろ！」

執事「無理！」

幸太郎「止めろー！、止めへんのやったらこんな輪っか外す！」

執事「無茶苦茶だ！」

衝撃音。

幸太郎「はあはあはあ・・・今のところもうちよつとゆっくり再生してください」

執事「あなた、無茶苦茶です」

幸太郎「あんた、お客の要望は何でも答えるんやろ!!、ゆっくり再生してくれや!」
執事「無茶苦茶だ!」

幸太郎「早く」

テープの巻き戻し音。

嫁「あんた!、目開けてえや。もうきつい事言わへんから!、あんた!、死なんとい
て!」

誠一郎「お父ちゃん!。塾なんか行かんでええから、死なんといて!」

愛「おとうちゃん!、死んだらあかん!」

嫁「いや〜!」

間。

幸太郎「(涙声)なんやねんこれ・・・俺の事、俺の事死ぬな、言うてる」

執事「終わりです。すべての再生が終わりました。あなたは、亡くなりました」

幸太郎「戻して下さい」

執事「無理です」

幸太郎「戻せ!」

執事「無茶です!」

幸太郎「何が天使の輪じゃ!、こんなもん!」

執事「あー、それを外すと地獄へ落ちますよ!」

幸太郎「何が地獄じゃー!、閻魔大王に掛け合っても戻ったるわー!」

激しい衝撃音。

間。

嫁「あんた、ごめんな、ごめんな。痛かったやろ!、ごめんな。そんなにつらかったんわ

からへんかった。頼むわ、目開けてえな。お願いやから、お願いやから」

誠一郎「おとうちゃん、あかん、僕らおいていくなんてあかん」

愛「お父ちゃん、パンツ一緒に洗ってええから死んだらあかん!。わーん」

医者「・・・ご臨終です」

嫁・誠一郎・愛「(絶叫)」

しばらく、嗚咽など続き、

愛「・・・あれ、お父ちゃん目から涙出てる」

嫁「お父ちゃん死んでもたからもう泣いたりできひん」

誠一郎「ほんまや、お父ちゃん泣いてる！」

心音。

医者「どういうことだ！」

看護師「先生！」

嫁「あんた！」

間。

幸太郎「・・・どこやここ・・・地獄に落ちてもうたんか」

嫁「あんた！」

幸太郎「閻魔大王」

嫁「何言うてんのよ、あほ！・・・良かった」

誠一郎「お父ちゃん！」

愛「お父ちゃん生き返った！」

幸太郎「いたた。体痛い」

嫁「あほ！、死のうとするなんて反則や！、ほんまあほやねんから！」

幸太郎「すまん。ほんますまん」

誠一郎「俺、おとうちゃんみたいには絶対ならへんからな。塾いけんでも、めっちゃ勉強する」

幸太郎「すまんなあ」

愛「私毎日病院来る。お父ちゃんと一緒におる」

幸太郎「・・・ああ、ここはきつと天国なんや。みんなごめんな。お父ちゃん、ええお父ちゃんになりたいねん」

音楽・遠き山に日が落ちて・アウト

終わり

煉獄ホテル

2014年3月16日 発行

著者 小林正資

発行者 李鳳龍(オオハラ.李.ヒデハル)

発行所 描楽書蔵

郵便番号 135-0016

東京都江東区東陽1-28-13-401

お問い合わせ oohara.lee@ka-kuzo.jp

サイト <http://www.ka-kuzo.jp>

本作品のコピー、印刷、スキャン、デジタル化等の無断複製は著作権法上での例外を除き禁じられています。
本作品を代行業者等に依頼してコピー、印刷、スキャン、デジタル化する事はたとえ個人や家庭内の利用でも著作権法違反です。